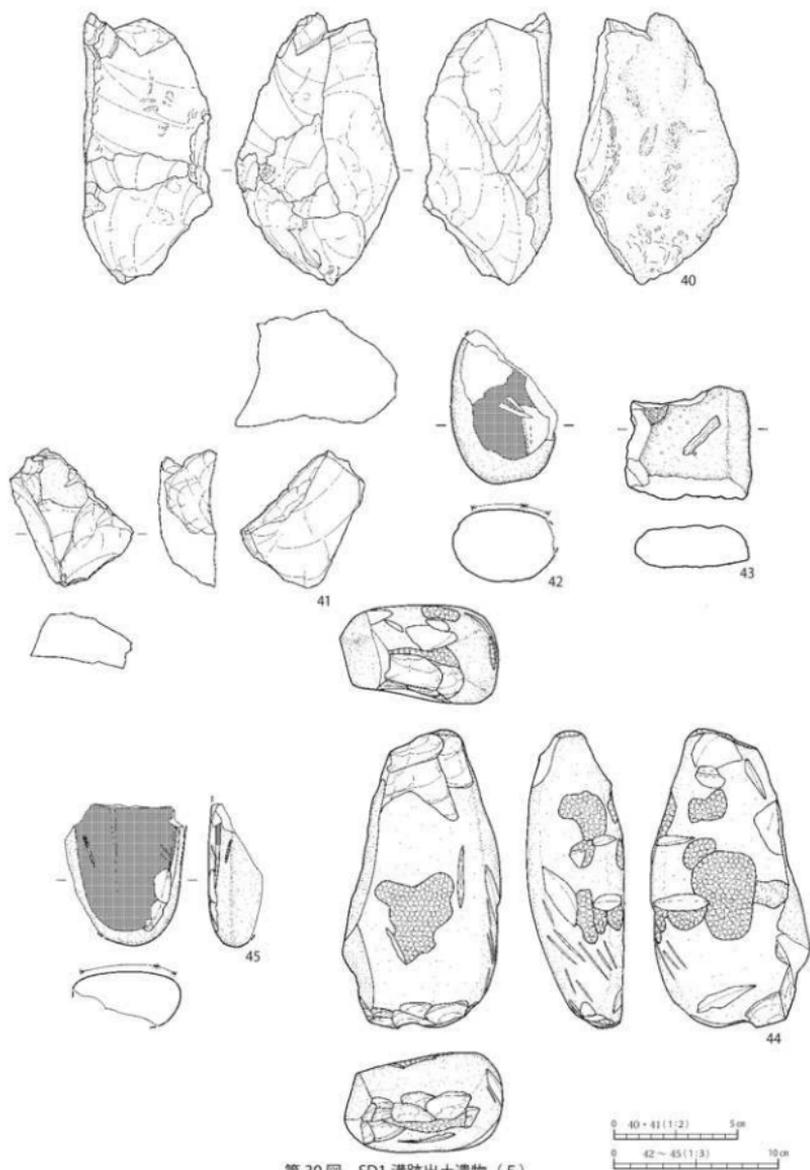
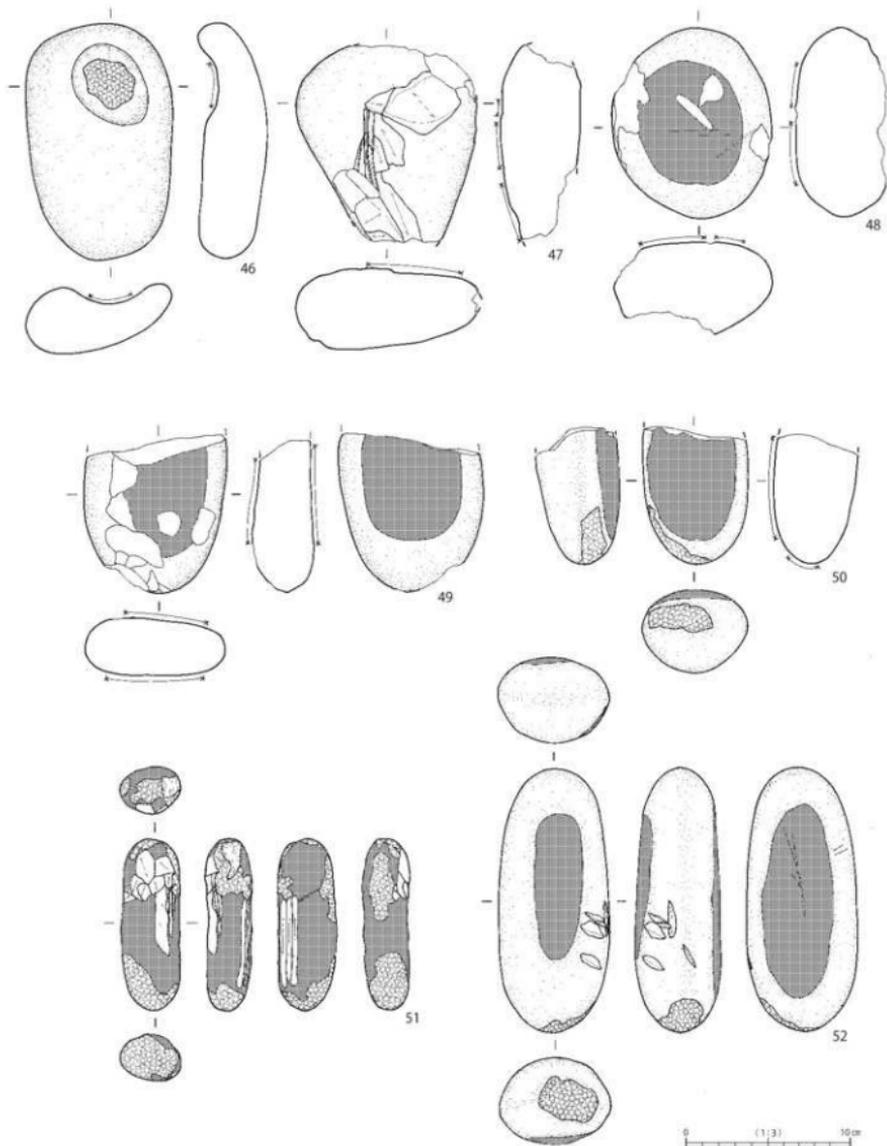


第29図 SD1 溝跡出土遺物 (4)



第30図 SD1 満跡出土遺物 (5)



第31图 SD1 溝跡出土遺物(6)



第 32 図 SD1 満跡出土遺物 (7)

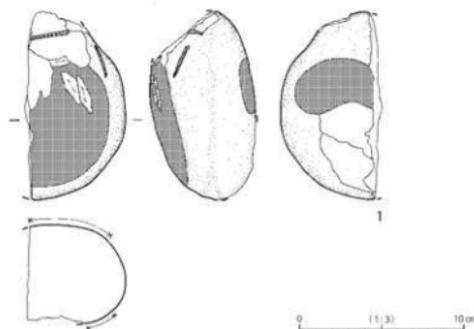
SD1 溝跡出土遺物観察表

図号	整理番号	出土地点	層位	種別	器種	口径×底径×高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真 掲載
1	C-8	17	1層	土師器	杯	10.4φ×××0.5φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)	外面別線1条	11
2	C-2	14	横出面	土師器	杯	11.5φ×××0.6φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
3	C-11	3	1層	土師器	杯	14.4φ×××0.9φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
4	C-9	17	1層	土師器	杯	15.1φ×××0.5φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
5	C-4	30	横出面	土師器	杯	13.0φ×××0.3φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
6	C-25	9	横出面	土師器	杯	11.4φ×××0.8φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
7	C-10	17	1層	土師器	杯	17.5φ×××0.4φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)		11
8	C-3	14	横出面	土師器	杯	—×××0.2φ	1層部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)	外面別線2条	11
9	C-6	10	1層	土師器	高杯	—×(18.8)×0.5φ	ヨコナデヘラナデ	ヘラナデ	別線	11
10	C-23	17	2層	土師器	甕	15.9×8.4×27.8	1層部ヨコナデ、洗線1条、製部ヘラケズリ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ		11
11	C-24	30	1層	土師器	甕	16.4××××29.6φ	1層部ハケメヨコナデ、製部ハケメ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ		11
12	C-20	15	1層	土師器	甕	15.7φ×××(14.3)	1層部ヨコナデ、製部ハケメ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ		12
13	C-16	15	1層	土師器	甕	—×9.0×(18.8)	製部ヘラケズリヘラミガキ	製部ヘラナデ		12
14	C-18	37	2層	土師器	甕	—×××(17.0)	製部ト下ハケメト下ヘラケズリ	製部ヘラナデ		12
15	C-17	15	1層	土師器	甕	20.0φ××××23.9φ	1層部ヨコナデ、製部ヘラケズリヘラミガキ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ		12
16	C-12	17	2層	土師器	甕	23.0φ×8.0×31.5φ	1層部ヨコナデ、製部ハケメヘラケズリ	1層部ヨコナデ、体部ハケメヘラナデ	底面ヘラケズリ	12
17	C-26	14	2層	土師器	鉢	12.0×6.5×6.1	1層部ヨコナデ、製部ハケメ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ	底面ヘラケズリ	12
18	C-7	10	1層	土師器	鉢	10.0φ×5.4×9.1	ナデ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ	輪縁直	12
19	C-22	14	1層	土師器	小甕	11.5×8.6×14.3	1層部ヨコナデ、製部ヘラケズリ	1層部ヨコナデ、製部ヘラナデ	底面ヘラケズリ	12
20	C-19	20	1層	土師器	小甕	11.8φ×8.5×12.7	1層部ハケメヨコナデ、製部ハケメ	1層部ヨコナデヘラナデ、製部ヘラナデ	底面ヘラケズリ	13
21	C-21	15	1層	土師器	小甕	—×8.3×(11.4)	ト下ヘラナデ、ト下ヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色陶質)	輪縁直	13
22	E-9	14	2層	須恵器	杯	12.4φ×8.0×3.1	1層部ロケ調整(洗線1条、体部別線ヘラケズリ)	ロケ調整		13
23	E-10	14	2層	須恵器	蓋	15.6φ××××0.5φ	ロケ調整、天目部ヘラケズリ	ロケ調整、方エリ有り		13
24	E-15	3	2層	須恵器	蓋	11.3××××4.6	ロケ調整、ボタン状ツマミ、洗線2条	ロケ調整	外面別線部物付着	13
25	E-16	30	1層	須恵器	蓋	7.7××××2.7	ロケ調整、宝珠状ツマミ	ロケ調整、方エリ有り		13
26	E-5	17	1層	須恵器	蓋	9.6××××2.0	ロケ調整、天目部ヘラケズリ、宝珠状ツマミ	ロケ調整、方エリ有り		13
27	E-4	17	1層	須恵器	蓋	12.2φ××××2.0	ロケ調整、底面ヘラケズリ	ロケ調整		13
28	E-24	15	1層	須恵器	柳形甕	30.0×16.0×9.1	ロケ調整、体部中央部有目付・ト下部ヘラケズリ	ロケ調整、体部ト下ヘラナデ		13
29	E-23	15	1層	須恵器	平皿	5.6××××13.5	ロケ調整、製部ト下部別線ヘラケズリ	ロケ調整	外面ト下自然蝕	13
30	E-22	14	横出面	須恵器	柳形甕	17.9φ×10.1×13.1	ロケ調整、口縁線4-5条、製部ト下部ヘラケズリ	ロケ調整		13
31	E-7-13	15-17	1-2層	須恵器	長頸瓶	10.0φ××××21.9φ	ロケ調整、製部ト下部別線ヘラケズリ	ロケ調整、製部ヘラナデ	フラスコ形	14
32	E-17	30	1層	須恵器	高杯	—×××8.2φ	ロケ調整	ロケ調整		14
33	E-14	17	2層	須恵器	高杯	—×××6.3φ	ロケ調整	製部		14
34	E-11	14	2層	須恵器	甕	12.8φ××××8.3φ	1層部ロケ調整、製部印子目ロケ調整、製部平行印子目	1層部ロケ調整、製部青濁文		14
35	E-8	17	1層	須恵器	甕	25.8φ××××8.5φ	1層部ロケ調整、製部平行印子目	1層部ロケ調整、製部青濁文		14
36	E-2	14	1層	須恵器	横瓶	—×××—	横さ目、平行印子目	青濁文		14
37	E-3	14	1層	須恵器	甕	27.0φ××××7.2φ	1層部ロケ調整、製部平行印子目	1層部ロケ調整、製部青濁文		14
38	E-6	23	1層	須恵器	甕	—×××—	製部平行印子目	青濁文		14
39	E-12	14	2層	須恵器	甕	—×××—	平行印子目	青濁文		14

図号 (整理番号)	整理番号	出土地点	層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石材	備考	写真 掲載
40	K-a-1	4	1層	打製石器	石核	11.4×6.6×5.2	371	流紋岩	明確な打点不明、薄剥材、自然面残存	15
41	K-a-2	17	1層	打製石器	刮削	5.6×5.0×2.4	48	流紋岩	刮削素材、自然面残存	15
42	K-c-13	23	横出面	磨石	磨石	29.3×16.4×4.4	180	凝灰岩	磨り1面、縦紋直有り	15
43	K-c-2	4	1層	磨石	磨石	26.8φ×7.6φ×2.6	175	凝灰岩	磨り2面、縦紋直有り	15
44	K-c-3	4	1層	磨石	磨石	18.1×9.6×6.0	793	凝灰岩	磨り1面、縦紋直有り、縦紋直有り	15
45	K-c-9	10	横出面	磨石	磨石	28.7φ×7.4φ×3.1	105	凝灰岩	磨り1面、縦紋直有り	15
46	K-c-4	14	2層	磨石	磨石	14.3×9.0×4.4	837	安山岩	磨き1箇所(自然の残みを利用)	15
47	K-c-4	4	3層	磨石	磨石	11.8×11.1×4.9	498	凝灰岩	縦紋直有り	15
48	K-c-15	20	横出面	磨石	磨石	11.5×9.8×5.6	727	安山岩	磨り1面、縦紋直有り	15
49	K-c-11	23	横出面	磨石	磨石	26.6φ×8.7×3.6	235	安山岩	磨り2面	15
50	K-c-12	23	横出面	磨石	磨石	28.3φ×8.4×3.1	229	安山岩	磨り1面、磨き1箇所	15
51	K-d-6	4	4層	磨石	磨石	10.5×3.7×2.8	95	凝灰岩	磨り2面、磨き2箇所	15
52	K-c-6	4	4層	磨石	磨石	16.1φ×6.7φ×3.2	526	凝灰岩	磨り2面、磨き2箇所	15
53	K-d-1	14	横出面	磨石	磨石	8.4×5.3×2.1	89	凝灰岩	磨き1箇所	16
54	K-c-8	29	1層	磨石	磨石	28.0φ×9.1φ×2.8	180	凝灰岩	磨り1面、縦紋直有り	16
55	K-d-4	17	2層	磨石	磨石	7.1×4.7×1.0	50	凝灰岩	縦紋直有り	16
56	K-d-5	14	2層	磨石	磨石	9.3×7.8×1.6	110	凝灰岩	磨り1面	16
57	K-d-7	30	1層	磨石	磨石	9.1×6.0×0.9	68	粘板岩	磨り1面	16
58	K-c-14	23	横出面	磨石	磨石	11.9φ×7.3φ×3.7	204	凝灰岩	磨り1面、縦紋直有り	16

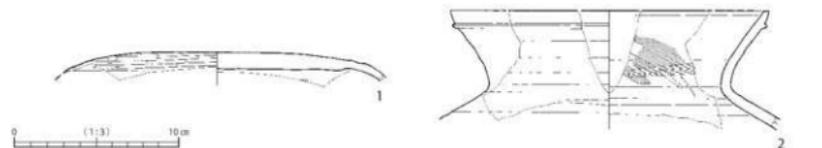
図号 (整理番号)	整理番号	出土地点	層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	特徴	備考	写真 掲載
59	G-1	12	横出面	瓦	平瓦	(11.4×(既)×2.8)	凸面：縦割り目、ヘラナデ 凹面：布目織、ヘラケズリ、褐色塗布		16
60	P-5	24	1層	土製品	土器片	—×××(5.3)	外面：ト下ヨコナデ、内面：別線物付着		16

図号 (整理番号)	整理番号	出土地点	層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	特徴	備考	写真 掲載
61	N-16	15	横出面	金属製品	釘	6.6φ×(既)×0.7φ	横断面：方形		16
62	N-19	4	1層	金属製品	釘	12.8φ×0.6×0.7	横断面：方形		16
63	N-17	14	横出面	金属製品	環状製品	4.2×1.4×0.7			16



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	部種	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	K.C-10	14	1層	磨石器	磨石	11.4 × (6.7) × 6.0	270	凝灰岩	磨り1面、磨痕痕有り	16

第33図 SD 2 溝跡出土遺物



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	部種	口径 × 底径 × 器高 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真掲載
1	E-18-19	29	1層	須恵器	器	— × — × (21)	口ウレ調整、玉井部凹めヘラケズリ	口ウレ調整、玉井部ヘラナデ	磨の可能性有り	16
2	E-20	29	横川面	須恵器	器	(19.4) × — × (7.3)	口ウレ調整	口ウレ調整、一部ヘラナデ		16

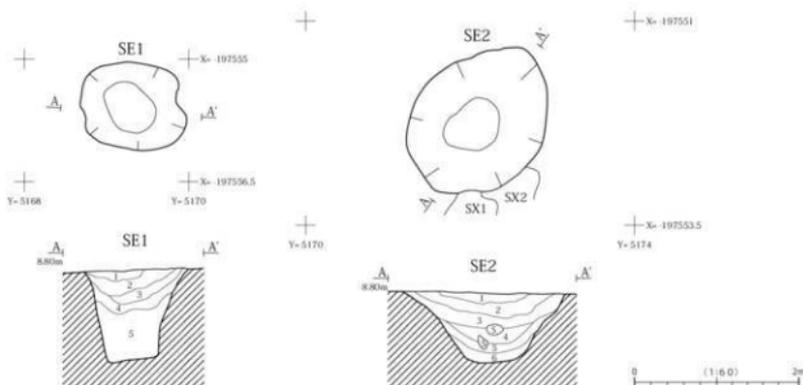
第34図 SD 5 溝跡出土遺物



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	部種	口径 × 底径 × 器高 (cm)	外面調整	内面調整	備考	写真掲載
1	C-15	23	1層	土師器	埴	(16.8) × — × (8.5)	口縁部コナデ、体部ヘラケズリ			16

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	部種	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	特徴	備考	写真掲載
2	P-6	46	1層	土製品	土師	(3.0) × 1.4 × 0.6	孔径0.5cm、ナデ調整		16

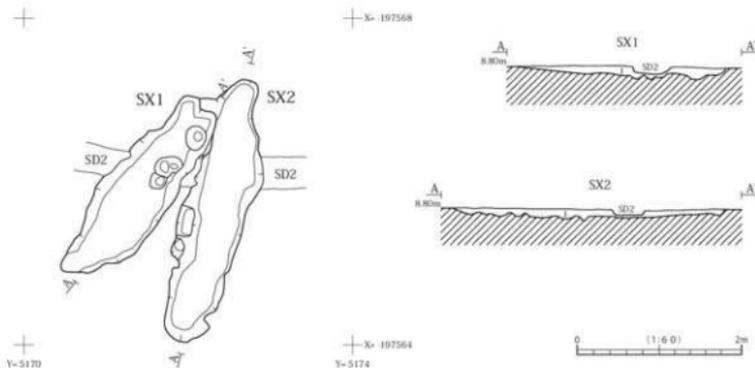
第35図 SD 6 溝跡出土遺物



遺構名	グリッド	遺構関係	平面形	断面形	規模(m)			備考
					長軸	短軸	深さ	
SE1	22	SD4を切る。	不整形円形	逆台形	126	106	124	
SE2	19・20	SX1・2に切られ、SD1を切る。	楕円形	逆台形	203	155	93	

遺構名	階位	土色		土性	備考
		上	下		
SE1	1	5Y3/1	オリーブ灰色	シルト	5Y5/3 灰オリーブ色土ブロックを多量含む。礫化跡を少量含む。
	2	5Y2/1	灰色	シルト	5Y4/1 灰色土ブロックを両側に多量含む。礫化跡を少量含む。
	3	5Y2/1	灰色	粘土質シルト	
	4	2.5Y2/1	灰色	粘土質シルト	5Y6/2 灰オリーブ色土ブロックを全体に多量含む。内側に5Y4/1 灰色土ブロックを多量含む。
	5	2.5Y2/1	灰色	粘土質シルト	5Y6/1 灰色土ブロックを全体に少量含む。径10cm程度の礫を含む。
SE2	1	5Y3/1	オリーブ灰色	シルト	
	2	5Y3/2	オリーブ灰色	シルト	10YR4/1 赭灰色土ブロックを含む。
	3	10YR3/1	黒褐色	粘土	5YR3/2 暗赤褐色土ブロックを含む。
	4	10YR3/2	黒褐色	粘土	
	5	10YR2/1	灰色	粘土	10YR5/1 赭灰色土ブロックを含む。
	6	10YR2/2	黒褐色	粘土	粘性強い。

第36図 SE1・2井戸跡平面・土層断面図



遺構名	グリッド	遺構関係	平面形	断面形	規模(m)			備考
					長軸	短軸	深さ	
SX1	19・20・22・23	SD25に切られ、SD1、SD2、SX2を切る。	不整形円形	不整形	258	88	15	
SX2	20・23	SD2、SX1に切られる。	不整形円形	不整形	328	81	13	

遺構名	階位	土色		土性	備考
		上	下		
SX1	1	5Y3/1	オリーブ灰色	シルト	10YR4/2 灰黄褐色土ブロック・礫化跡を含む。底面に凹み有り。
		5Y3/1	オリーブ灰色	シルト	10YR4/2 灰黄褐色土ブロック・礫化跡を含む。底面に凹み有り。

第37図 SX1・2性格不明遺構平面・土層断面図

1. 郡山遺跡（2丁目地区）におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。ここでは、郡山遺跡（2丁目地区）における稲作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

2. 試料

試料は、第1トレンチの北壁において、上位よりオリープ黒色粘土質シルト（Ⅰ層）、暗緑灰色粘土質シルト（Ⅱa層）、黄灰色粘土質シルト（Ⅲa層）、黒褐色粘土質シルト（Ⅳ層）、褐灰色粘土質シルト（Ⅴ層）、灰黄褐色砂質シルト（Ⅵ層）の6点である。このうち、Ⅲa層とⅣ層については水田土壌の可能性が考えられている。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。（1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）、（2）試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）、（3）電気灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理、（4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散、（5）沈底法による20 μm 以下の微粒子除去、（6）封入剤（オイクット）中に分散してプレパラート作成、（7）検鏡・計数。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザザ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザザ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、第38図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真（写真1）を示す。

5. 考察

当該調査区では、Ⅰ層とⅡa層でイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、Ⅰ層ではプラント・オパール密度がそれぞれ6,800個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う際の基準値である3,000個/gを大きく上まわっている。このことから、Ⅰ層については耕作層であった可能性が極めて高いと判断される。なお、Ⅱa層ではプラント・オパール密度が1,200個/gとやや低い値であることから、あるいは上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

イネ以外の分類群では、ヨシ属がI層とIII層で、ススキ属型がI層～IV層で、ネザサ節型とクマザサ属型がすべての層で検出された。このうち、II a層～IV層にかけてはネザサ節型が優勢であり、III a層ではクマザサ属型やヨシ属も比較的多い。こうしたことから、I層～VI層の堆積当時は調査地点一帯は比較的乾いた環境であり、II a層～IV層の時期は周辺にネザサ節が多く生育しており、III a層ではススキ属やクマザサ属も多かったと推定される。なお、I層とIII a層では近辺に湿地的なところもみられたと推定される。

6. まとめ

郡山遺跡（2丁目地区）第1トレンチにおいてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の可能性について検討した。その結果、水田耕作層の可能性が認められたのはI層のみであった。なお、水田土壌の可能性が考えられていたIII a層とIV層については、稲作の痕跡は認められなかった。

文献

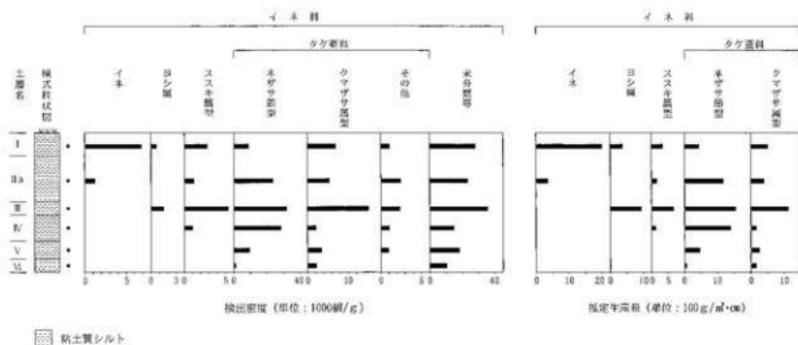
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83。
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学，同成社，p.189-213。
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学，9，p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学，17，p.73-85。

表1 仙台市、郡山遺跡（2丁目地区）のプラント・オパール分析結果
 検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名） \ 土層		地点名 東壁					
		I	II a	III a	IV	V	VI
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	68	12				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	6		15			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	28	12	53	10		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	91	240	323	288	95	11
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	68	54	150	20	34	22
その他	Others	11	24	23	10	9	
未分類等	Unknown	279	234	353	144	181	104
プラント・オパール総数		552	576	915	472	319	137

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	2.01	0.35				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.36		0.95			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.35	0.15	0.65	0.12		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.44	1.15	1.55	1.38	0.46	0.05
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.51	0.41	1.13	0.15	0.26	0.16



第 38 図 (図 1) 郡山遺跡 (2丁目地区) におけるプラント・オパール分析結果

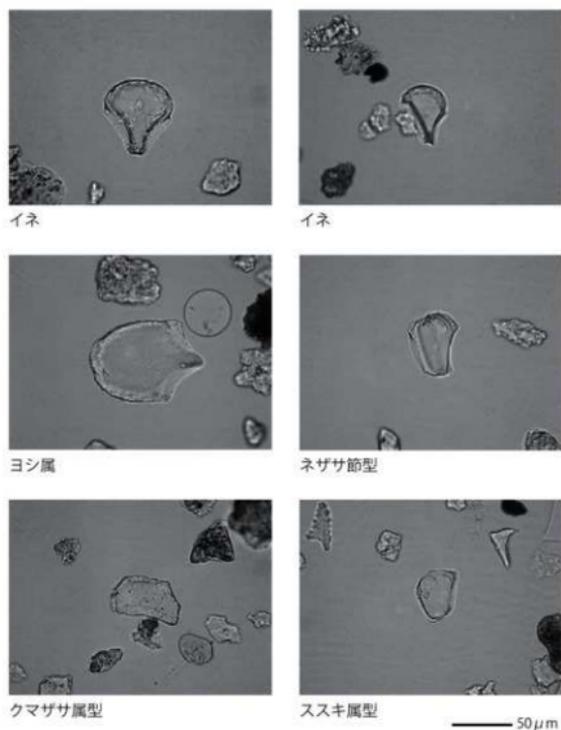


写真 1 プラントオパールの顕微鏡写真

II. 郡山遺跡（2丁目地区）における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、第9トレンチ東壁より採取された堆積物10点である。堆積物は、上位からオリブ黒色シルト（I c層）、黒色粘土質シルト（I d層）、暗灰色粘土質シルト（II a層）、暗灰色粘土質シルト（II b層）、灰黄色粘土質シルト（II c層）、灰黄褐色粘土質シルト（III層）、褐灰色粘土質シルト（IV層）、黄灰色砂質シルト（V a層）、暗灰色粘土質シルト（VI層）、灰色粘土質シルト（VII層）である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- (1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- (2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- (3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- (4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- (5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- (6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とする。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉3、シダ植物胞子2形態の計28である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第39図（図2）に示す。なお、主要な分類群は写真2に示した。

以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、セシダン属、モチノキ属、カエデ属、ニワトコ属—ガマズミ属、スイカズラ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、ウコギ科

[草本花粉]

イネ科、セリ亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

全体的に花粉の密度が低いなか、3層のみ100個以上を計数できた。Ⅲ層では草本花に比べ粉樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉のハンノキ属が優占し、ブナ属が伴われる。また、コナラ属コナラ亜属、クリ、マツ属複雑管束亜属などが検出される。草本花粉は非常に少なく、イネ科、セリ亜科、ヨモギ属が出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

第9トレンチ東壁の堆積物はいずれも花粉密度が非常に低い。このことから、各層とも花粉などの分解されやすい乾湿を繰り返す堆積環境であったことが考えられる。なお、Ⅲ層では堆積地周辺にハンノキ属が分布していたと推定される。生態上からみて、ハンノキ属は湿地性のハンノキとみなされ、ハンノキ林の分布が考えられる。また、周辺地域はブナ属を主にコナラ属コナラ亜属、クリなどを構成要素とする冷温帯性落葉広葉樹林の分布する森林植生であったと考えられる。草本は少なく、シダ植物やイネ科、セリ亜科、ヨモギ属などが周辺に生育していたと推定される。

6. まとめ

郡山遺跡（2丁目地区）第9トレンチにおいて花粉分析を行った。その結果、花粉密度が非常に低いことから、花粉などの分解されやすい乾湿を繰り返す堆積環境であったことが推定された。3層の時期は周囲にハンノキの湿地林が分布し、周辺地域の森林は、ブナ属を主とする冷温帯性落葉広葉樹林が分布していたと推定された。

参考文献

中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110。

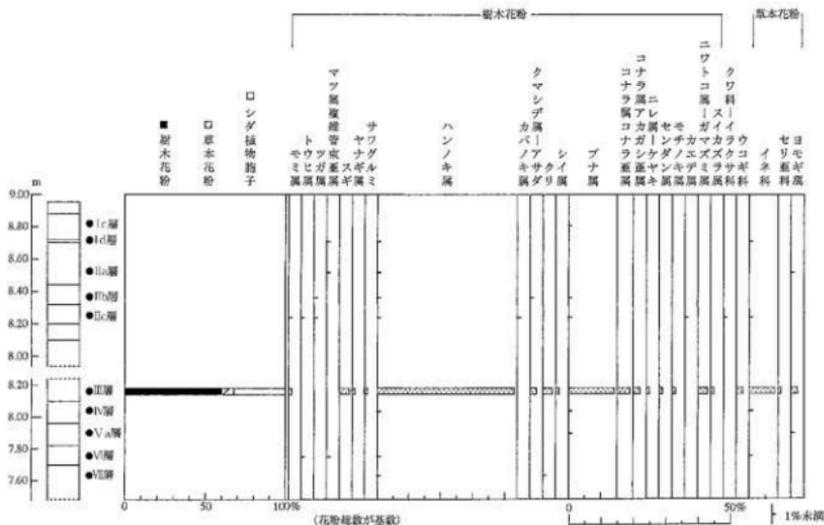
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本。第10巻。古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。

中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、13、p.187-193。

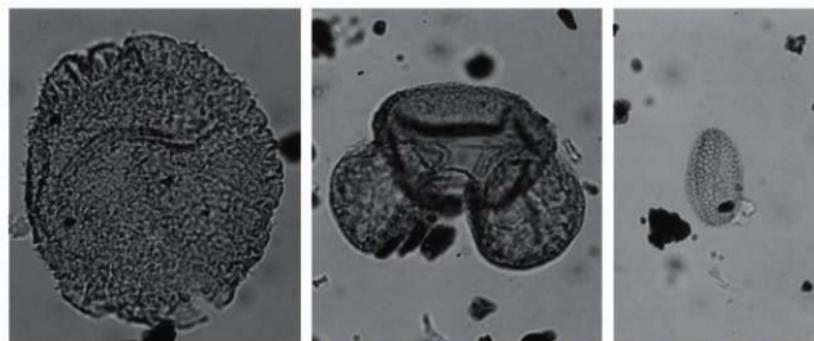
中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。



第 39 図 (図 2) 郡山遺跡、第 9 トレンチ東壁における花粉ダイアグラム

表 2 郡山遺跡における花粉分析結果

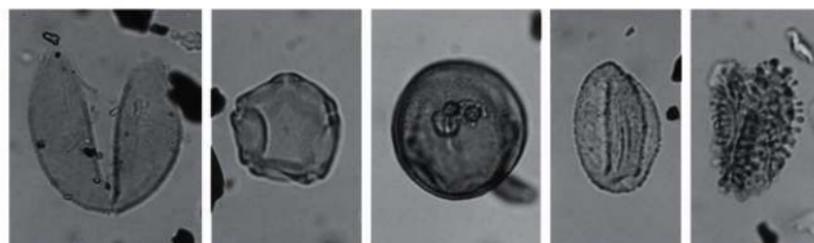
学名	和名	郡山トレンチ東壁																			
		11	12	13	14	15	16	17	18	19	20										
Arboreal pollen																					
<i>Pinus</i>	松花粉					1	1														
<i>Quercus</i>	コナラ属																				
<i>Alnus</i>	アザミ属																				
<i>Ulmus</i>	ウツギ属																				
<i>Tilia</i>	トナリ属																				
<i>Platanus</i>	オリーブ																				
<i>Salix</i>	ヤナギ属																				
<i>Platanus ssp. Deltoides</i>	マツノオシロスミ																				
<i>Corylus japonica</i>	クルミ																				
<i>Juglans</i>	ナツメ																				
<i>Platanus ssp. ovata</i>	オリーブ																				
<i>Castanea</i>	トナリ																				
<i>Corylus</i>	クルミ																				
<i>Quercus ssp. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属																				
<i>Quercus ssp. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アザミ亜属																				
<i>Ulmus ssp. ovata</i>	ウツギ属ウツギ																				
<i>Malus</i>	リンゴ属																				
<i>Ilx</i>	ヒメノキ属																				
<i>Acer</i>	カエデ属																				
<i>Sambucus ssp. racemosa</i>	ニワトコ属ニワトコ																				
<i>Lonicera</i>	ニギハシク																				
Arboreal - Nonarboreal pollen																					
<i>Monarda</i>	アザミ																				
<i>Artemisia</i>	ヨモギ																				
Nonarboreal pollen																					
<i>Gramineae</i>	イネ科																				
<i>Urticaceae</i>	ウラボシ科																				
<i>Fern spores</i>	シダ植物胞子																				
<i>Mammalia type spores</i>	哺乳動物糞																				
<i>Trilete type spores</i>	三葉形胞子																				
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉																				
<i>Arboreal - Nonarboreal pollen</i>	樹木・非樹木花粉																				
<i>Nonarboreal pollen</i>	非樹木花粉																				
<i>Total pollen</i>	花粉総数																				
<i>Unidentified pollen</i>	未同定花粉																				
<i>Fern spores</i>	シダ植物胞子																				
<i>Holozanth eggs</i>	有孔虫卵																				
	空白未同定胞子																				



1 ツガ属

2 マツ属複雑管束胚乳属

3 ヤナギ属



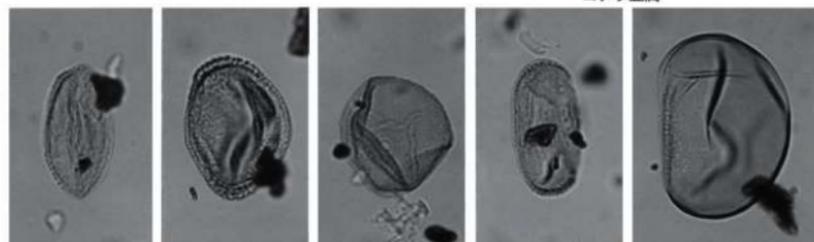
4 スギ

5 ハンノキ属

6 ブナ属

7 コナラ属
コナラ亜属

8 モチノキ属



9 カエデ属

10 ウコギ科

11 イネ科

12 セリ亜科

13 シダ植物単条溝胞子

— 10 μ m

写真2 花粉・胞子の顕微鏡写真

第八章 出土遺物と検出遺構について

1. 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、収納平箱で23箱分であるが、図化できたものは非常に少ない。種別的には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦・石器・金属製品・土製品などである。中でも官衙の時期にあたる土師器・須恵器が主体を占める。

ここでは、これらのうち図示できた土師器と須恵器について、これまでに出土した郡山遺跡の遺物及び他遺跡のものと比較検討しながら、年代的な位置付けをしていきたい。

(1) 土師器

出土した土師器はいずれも製作にロクロを使用していないもので、器種には坏・甕・小型甕・高坏・鉢などがみられる。S D 6 溝跡と4 トレンチから1点ずつの出土以外は、S D 1 溝跡の検出面及び堆積土からの出土である。これらは器種やそれぞれの特徴から、以下のように分類される(第40図)。

<坏>

I類：内面がヘラミガキ調整で黒色処理が施されるものである。器形や調整等の特徴からさらに細分される。

A：外面の口縁部と体部の境に明瞭な段を有し、口縁部が直線的に外傾するもので、対応する内面にも段や稜を有する。さらに、1. 段の位置が上位にあるもの(C-8)、2. 段の位置が中位にあるもの(C-15)、3. 段の位置が下位にあるもの(C-25)に分けられる。段の位置により口縁部の幅や傾きに違いがみられる。いずれも外面の口縁部はヨコナデ・体部はヘラケズリ調整で、内面はヘラミガキ調整で黒色処理が施され、底部は概ね丸底に近いものである。2類(C-15)は比較的大型の部類に入るものであるが、器面調整は概ね共通の特徴を有する。

B：外面の口縁部と体部の境に稜を有し、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものである。さらに、1. 稜の位置が上位にあるもの(C-4・9)、2. 稜の位置が中位にあるもの(C-10)に分けられる。外面の口縁部はヨコナデ・体部はヘラケズリ調整で、内面はヘラミガキ調整で黒色処理が施される。1類(C-4・9)は口縁部の中ほどに1条の沈線を有する。2類は体部から口縁にかけて大きく外傾するもので、高坏の坏身の可能性がある。

II類：段や稜をもち、体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がるもの(C-14)である。内・外面ともに丁寧なヘラミガキ調整と黒色処理が施され、器形は半球状を呈するものとみられる。

III類：幅の狭い屈曲する口縁部を有するもの(C-2・11)である。外面の口縁部はヨコナデ・体部はヘラケズリ調整で、内面はヘラナデ調整されるものである。器面は赤褐色を呈し、胎土は薄手で焼き締まりがよく、半球状の器形になるものとみられる。

<甕>

I類：長胴形のもので、A. 口縁部と体部の境を沈線で区画し、口縁部が外反ぎみになるもの(C-17)と、B. 口縁部と体部の境にくびれがなく、緩く外傾するもの(C-12)がある。A類は外面の口縁部がヨコナデ・体部はヘラケズリ調整が主体で若干ヘラミガキがみられる。内面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ調整である。器形は体部の張りが弱く、最大径は口縁部にある。B類は外面の口縁部がヨコナデ・体部は上半がハケメ・下半がヘラケズリ調整である。内面は口縁部がヨコナデ、体部はハケメとヘラナデ調整である。最大径は口縁部と体部が同じくらいで、体部の張りも弱い。

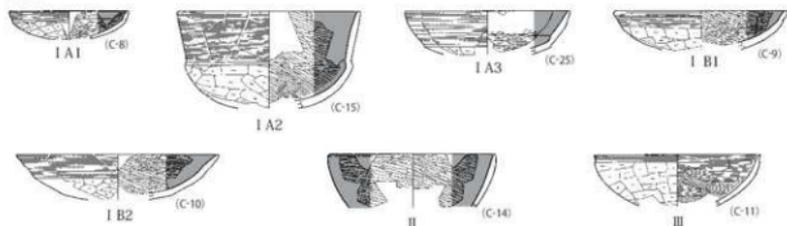
II類：球胴形のもので、A. 体部の外面調整がハケメのもの(C-20・24)、B. 体部の外面調整がヘラケズリのもの(C-23)、C. 体部の外面調整が主にヘラミガキのもの(C-16)に分けられる。A類は体部の

外面調整がハケメ主体のもので、最大径は体部のほぼ中位にある。外面の口縁部と体部の境に段を有し、口縁部はヨコナデ調整で緩く外傾する。内面の調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデである。B類は体部の外面調整がヘラケズリ主体のもので、最大径は体部の中位より若干下にある下膨れの裏である。口縁部は緩く外傾し、内外面ともにヨコナデ調整で、内面の体部調整はヘラナデである。C類は口縁部から体部上半を欠損するが、最大径は体部の中位とみられ、ほぼ球形に近いものである。外面はヘラミガキ調整が主体で、内面はヘラナデである。

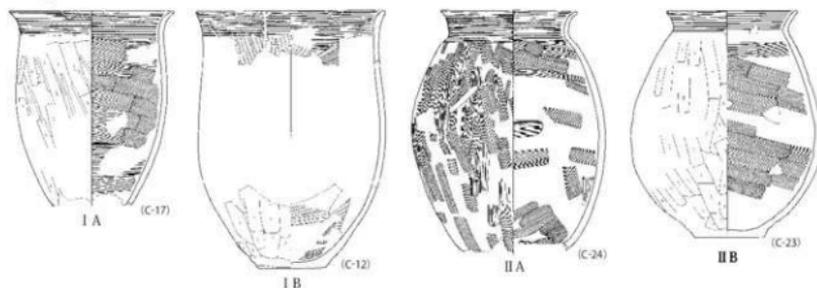
<小型甕>

I類：口縁部と体部の境にくびれを有するもの（C-19）で、外面の口縁部はヨコナデ・体部はハケメ、内面の調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデである。口縁部は緩く外傾し、最大径は体部中位にある。底面はヘラケズリ調整である。

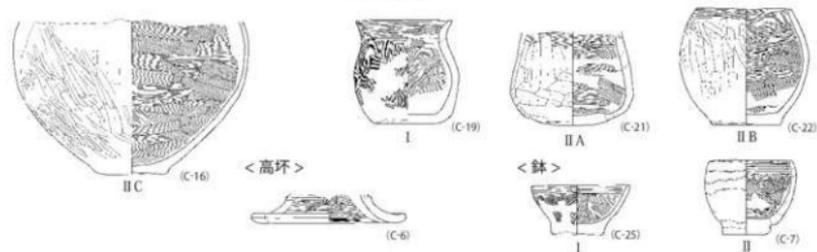
<坏>



<甕>



<小型甕>



第40図 土師器分類図

Ⅱ類：口縁部と体部の境にくびれないもので、口縁部にかけて内傾または内湾するものである。さらに、A、体部最大径が下半にある下膨れのもの（C-21）と、B、体部最大径が中位にあり、球形のもの（C-22）に分けられる。ともに、外面調整は口縁部がヨコナデ・体部はヘラケズリで、内面はヘラナデ調整である。

<高坏>

脚部の破片で、坏部の形状は不明である。上方に段を有し、裾部は強く外反ぎみになるもの（C-6）である。内外面ともヘラナデ調整で、円筒形であるが透かし孔の有無は不明である。

<鉢>

I類：口縁部と体部の境にくびれはなく、全体が緩く外傾するもの（C-26）である。外面調整は口縁部がヨコナデ・体部はハケメで、内面はヘラナデである。全体は甕の底部のような造りである。

Ⅱ類：体部から口縁部にかけて全体が内湾ぎみのもの（C-7）で、器面に輪積痕を明確に残す。口縁部と体部の区別はなく、外面調整はナデのようで、内面はヘラナデ調整である。

(2) 須恵器

器種には、坏・蓋・甕・平瓶・脚付短頸壺・高坏・盤・脚付盤・フラスコ形長頸瓶などがみられる。土師器と同様にほとんどの遺物は、SDI溝跡の検出面及び上層面からの出土である。これらは器種や特徴から、以下のように分類される（第41図）。

<坏>

I点（E-9）出土しており、体部中位に沈線状の段を有し、口縁部が直立ぎみになるものである。底部の切り離しは不明であるが、ロクロ成形後体部から底部にかけて回転ヘラケズリ調整が施されている。

<蓋>

I類：内面にカエリをもつもので、A、径10cm以下の小型のもの、と、B、径15cm以上の大型のものがある。A類は宝珠状のツمامミを有し、さらに、1、外面天井部が傾斜するもの（E-16）と、2、外面天井部が水平なもの（E-5）に分けられる。I類はロクロ調整のみであるが、2類は水平な外面天井部から肩部にかけてヘラケズリ調整が施されている。B類の大型のもの（E-10）は、傾斜する天井部にヘラケズリ調整は施されるが、ツمامミの有無は不明である。

Ⅱ類：I点（E-15）出土しており、内面にカエリのないもので、中央がくぼむボタン状のツمامミを有するものである。ロクロ調整によるもので、体部の中位に2条の沈線状の段を有する。小径の割には器高があり、口縁部は緩やかに外傾する。ツمامミから天井部にかけて、焼成時の溶解物が付着している。

<甕>

I類：口径13cm以下の小型のもの（E-1）で、口縁端部の下端を引き出し突帯状に成形している。外面頸部には文様をもたず、体部は平行叩き目・内面は同心円のアテ具痕を残す。

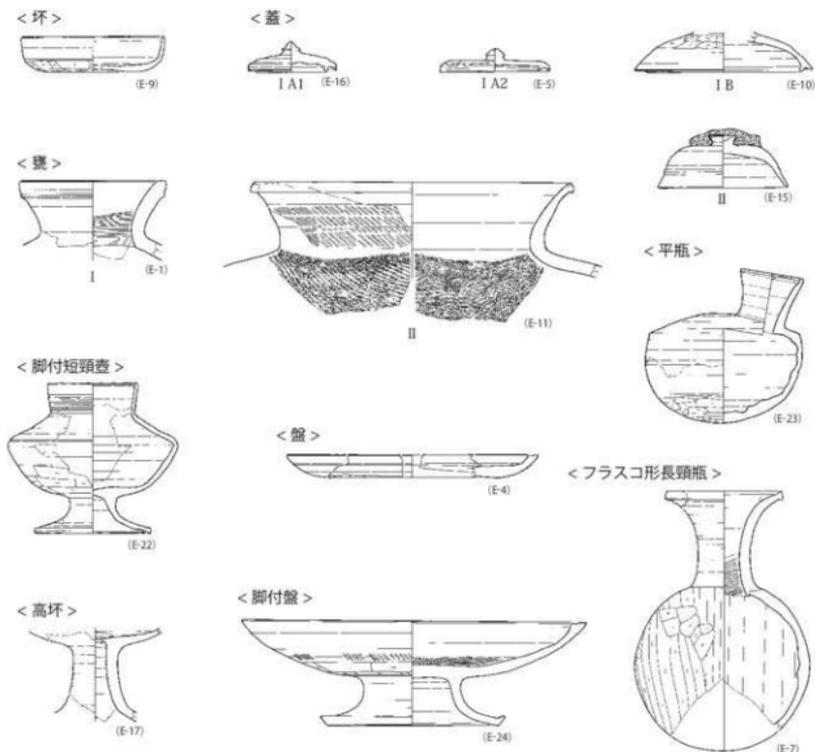
Ⅱ類：口径19～28cmの中型のもの（E-11）で、口縁端部の下端を引き出し成形している。外面頸部には文様をもたず、体部に平行叩き目、内面には同心円のアテ具痕を有する。また、頸部にも若干平行叩き目がみられる。

<平瓶>

I点（E-23）出土しており、体部上半にやや角張った稜を有するが、天井部は丸みを帯びる。外面の口縁から体部の中位及び内面の口頸部に自然軸がみられる。底部はロクロ成形後、回転ヘラケズリ調整が施される。

<脚付短頸壺>

I点（E-22）出土しており、口縁部は直立ぎみで頸部にかけて4～5条の沈線がみられる。体部はやや角張った器形をしており、脚部は緩やかに大きく外傾する。体部下半は回転ヘラケズリ調整がみられ、他はロクロ調整で



第 41 図 須恵器分類図

ある。しっかりした還元炎焼成ではなく、器面全体が赤褐色を呈する。

<高杯>

2点 (E-14・17) 出土しているが、ともに円筒状のロクロ成形で、杯部と脚の裾部を欠損している。

<盤>

1点 (E-4) 出土しており、器高が低い扁平なものである。口唇部は平坦に作られ、体部から口縁部にかけて緩く外傾するもので、外面底部はヘラケズリ調整、口縁部と内面はロクロ調整である。

<脚付盤>

1点 (E-24) 出土している。口唇部は平坦に作られ、底部から口縁にかけて緩く大きく外傾する。脚部は緩く外反し、裾部で段を有する。全体はロクロ成形であるが、外面の体部下半はかすかに平行叩き目がみられ、底部にかけては回転ヘラケズリ調整が施される。内面の底部はヘラナデ調整である。

<フラスコ形長頸瓶>

1点 (E-7) 出土している。口縁部は緩く外反し、下端に軽い段を有する。頸部の中ほどに2条の沈線を施し、器面はロクロ調整である。体部はロクロ成形後、底部に回転ヘラケズリ調整が施される。

(3) 出土土器の年代について

<土師器>

坏は、器形や調整痕等の特徴から3類に分けられる。坏Ⅰ類としたものは、外面に段や稜を有し、内面が黒色処理されるもので、これらの特徴からみると郡山遺跡坏A類（仙台市2005a）の中に含まれる。坏Ⅱ類としたものは外面に段や稜をもたず、口縁部から体部は内湾ぎみに立ち上がる。内外面ヘラミガキ調整と黒色処理が施され、半球状を呈する。このような器形・調整を有する坏は、Ⅰ期官衙の内区画のS A 225に先行するS A 276や、Ⅰ期官衙以前の竪穴住居跡、Ⅱ期官衙のS D 35溝跡からも出土している。この中でもⅡ期官衙のS D 35溝跡出土の坏AⅣ類（C-484）としたものに最も類似する。坏Ⅰ・Ⅱ類は東北地方南部の土師器編年（氏家1957）と比較すると、古墳時代後半の栗罎式の中で概ね捉えられるものである。郡山遺跡では、S D 35外郭大溝1層出土土器群（仙台市2005a）に7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられており、本遺跡出土のものも特徴などから同年代と考えられる。坏Ⅲ類は、いわゆる関東系土師器と呼ばれるもので、幅狭の屈曲する口縁部で半球状の器形を呈し、内面はヘラナデ調整される。郡山遺跡坏B類に含まれるもので、S I 79・S D 35から出土している。郡山遺跡ではⅠ期官衙の古い時期の遺構からは出土しておらず、Ⅰ期官衙が機能していたある時期から入り始めたものとしている。また、大和町一里塚遺跡（三好1999）の坏BⅠ類や名取市清水遺跡（丹羽1981）第Ⅴ群土器にも類例をみることができる。一里塚遺跡では7世紀後半代の中で考えられており、清水遺跡では関東地方との検討で、栗罎式の中でも新しい段階のものと理解されている。

甕は、器形から長胴形のもの（Ⅰ類）と球胴形のもの（Ⅱ類）に分けられる。甕ⅠA類は口縁部と体部の境を沈線でごく区画し、口縁部が外反ぎみになるもので、体部はヘラケズリ調整が主体である。これらの特徴からみると郡山遺跡甕AⅡⅠ類に相当するものであるが、沈線による区画がないなど若干の相違はみられる。甕ⅠB類は口縁部と体部の境に明瞭な区別はなく、口縁部は緩く外傾し、体部上半はハケメ・下半はヘラケズリ調整である。器形からみると郡山遺跡甕AⅣ類に近いが、調整痕などに若干の違いがある。むしろ方四町Ⅱ期官衙内のS E 429井戸跡から大量出土した甕類の中に類似するものがみられる。甕Ⅱ類は体部中位に強い張りをも有する球胴形のもので、体部の調整は3種がみられる。ハケメ調整を主体とする甕ⅡA類は、Ⅱ期官衙・Ⅰ号住居跡出土の甕（C-79-12）に最も類似しており、他に清水遺跡のⅣ～Ⅵ群土器の中にも近いものがみられる。郡山遺跡と比較すると甕BⅠⅠ類としたものに最も近いが、ずんぐりした器形のものが多いのに対して、本類はやや長胴ぎみであるという違いはみられる。ヘラケズリ調整を主体とする甕ⅡB類は、郡山遺跡甕BⅡ類に相当するもので、頸部のくびれや下膨れの器形などはS I 1389出土の甕（C-720）に近似するが体部の調整痕に違いはみられる。ヘラミガキを主体とする甕ⅡC類は、体部全体が丁寧なヘラミガキによる器面調整で、これに近似するものは郡山遺跡ではみられない。Ⅱ期官衙のS E 429から多量に出土した甕の中にも球形に近いものはあるが、体部の調整はハケメが主体である。ハケメ調整を主体とする甕は、東北地方で一般的にみられる土師器の特徴を示すものである。しかし、甕ⅠA・ⅡB類のように器形に違いはあるものの、体部外面にヘラケズリ調整が多用されるものについては、関東系土師器と呼ばれる坏Ⅲ類と同様に関東地方との関連も視野に入れて考える必要がある。

小型甕は、いずれも郡山遺跡小型甕Ⅰ・Ⅱ類の中に含まれる。Ⅱ類の頸部がなくヘラケズリ調整のものに類似するものは、郡山遺跡S B 597（C-551）から出土しており、関東地方南部に類似するものが見出せるとしている。これも坏Ⅲ類、甕ⅠA・ⅡB類と同じく考える必要がある。

高坏の脚部は窓の有無は不明で、Ⅱ期官衙外郭大溝S D 35出土のものに類似するが、若干の違いはある。また、外面に段を有するものはS D 552（C-540）から出土しているが、裾部の開き具合に違いがみられる。

鉢は、Ⅰ類としたものは郡山遺跡S I 290（C-202）出土のものや、清水遺跡第64号住居跡出土のものに類似する。また、Ⅱ類としたものは郡山遺跡ではみられず、清水遺跡第20号住居跡から出土したものに類似する。

<須恵器>

環は、体部中位に沈線状の段を有し、口縁部は器壁が薄く直立ぎみになるものである。特徴からみると、郡山遺跡の環Ⅰ 1 a 類に相当するものとみられるが、口縁の立ち上がりや体部の沈線状の段などに若干の相違はみられる。他の遺跡をみてみると一里塚遺跡 S D 33 溝跡出土の環 A Ⅲ 類に最も近似し、清水遺跡第 V 群土器の中にも類例がみられる。いずれも 7 世紀後半代から 8 世紀初頭の年代が与えられており、本類もその中で収まるものと考えられる。

蓋は、内面にカエリをもつもの（Ⅰ類）とカエリのないもの（Ⅱ類）に分けられる。蓋Ⅰ類はⅠ期官衙の遺構からの出土が多く、宝珠状ツマミで天井部が傾斜する蓋Ⅰ A 1 類は郡山遺跡蓋Ⅰ 1 a 類に相当する。また、宝珠状ツマミで天井部が水平になる蓋Ⅰ A 2 類は、郡山遺跡蓋Ⅰ 1 b 1 類に近似するがツマミの形状に若干の違いがみられる。蓋Ⅱ A 類は、内面にカエリをもたずボタン状のツマミを有するもので、郡山遺跡蓋Ⅱ 2 類に類似する。郡山遺跡のものは体部に段を有するもので、裾部は直線的に外傾する。一方本類のものは、天井部から緩やかに外傾するもので、体部中位に 2 条の沈線を有するなどの相違点がみられる。他の遺跡をみると、ツマミはないが 2 条の沈線を有し器形が非常に酷似したものが、仙台市南小泉遺跡第 4 次調査（仙台市 1978）の第 16 号住居跡から出土している。しかし、共伴土器から 5 世紀後半のものとしており、年代的にもかなり隔りがある。また、体部に沈線はみられないがツマミや器形が近似するものが、多賀城市山王遺跡（佐藤他 1997）の S I 491 住居跡からも出土している。T K 43 型式に類似するものとし、7 世紀前半頃に位置づけているが、本類は共伴関係から 7 世紀後半代のもので考えられる。

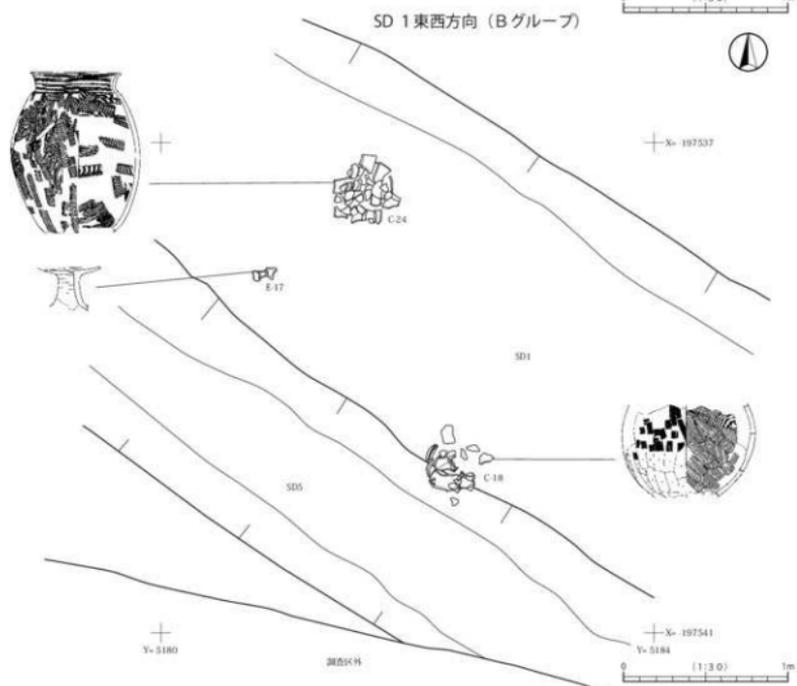
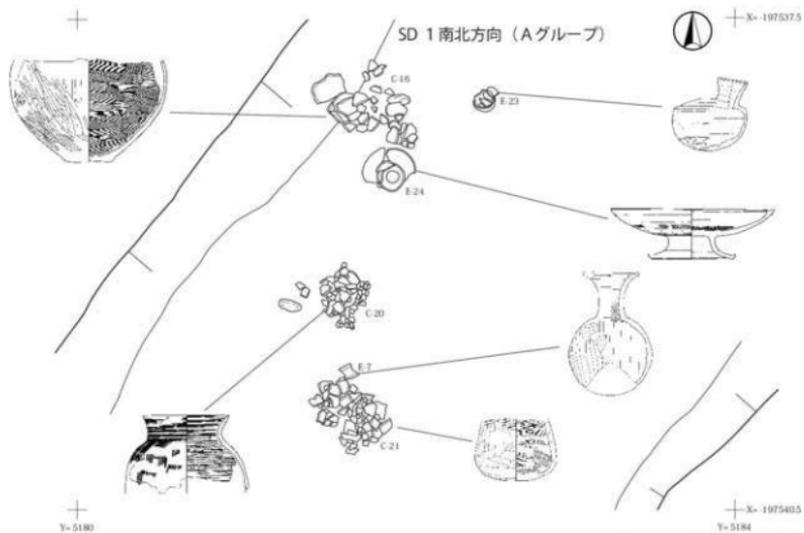
甕は、口径 13 ~ 28cm の小型・中型のもので、頸部には文様をもたない。全体の器形を知りえるものはなく、口縁から頸部はロク口調整で、体部外面は甲き目・内面には同心円のアテ具痕がみられる。郡山遺跡の甕Ⅱ 2 類に相当するものである。

平瓶は、全体に丸みを呈するが、体部上半にやや角張った稜を有する器形である。また、口縁部内面に 1 条の沈線を有する。郡山遺跡でみると、平瓶Ⅰ類に相当するもの（Ⅰ期官衙 S K 489・E-225）で、口縁部の大きさや器形等に若干の相違はみられる。また、S I 805 住居跡からは口縁部を欠損するが、本類と器形の類似するもの（E-269）が出土している。他に仙台市茂ヶ崎横穴墓群（仙台市 1995）の 20 号墳出土のものにも類似するものがみられる。

脚付短頸壺は、郡山遺跡ではみられないが、器形が類似する壺の上半部（Ⅱ期官衙 S I 390・E-212）が出土している。しかし、口頸部に沈線はなく、把手が付き大型である点などに相違がみられる。他の遺跡をみると、清水遺跡（丹羽 1981）の第 10 号溝跡から出土している壺は、口縁部と脚の裾部を欠損し、若干肩部に丸みを有するが器形は非常に酷似するものである。第 V 群土器に分類しており、共伴する土器器の特徴から栗園式の新しいものとし、7 世紀後葉を中心とした時期のものとしている。脚付短頸壺については器形等の特徴から田辺編年Ⅲ期 T K 217 型式（田辺 1966）に近いものとみられ、清水遺跡第 V 群土器と同様に 7 世紀後葉のもので考えられる。

高環は、環部と脚の裾部を欠損しており、全体の器形は不明であるが、郡山遺跡高環Ⅰ 1 類（S X 2093・E-483）に近いものとみられる。

脚付盤は、郡山遺跡Ⅰ期官衙の S X 2093（E-477）から出土しているが、体部の器形に違いがみられる。他の遺跡をみると、郡山市清水台遺跡の第 5 次 A 地点の S K 503 土坑（東北 2005）から出土しており、7 世紀後葉の時期のものとしている。東京都町田市の多摩ニュータウン№ 342 遺跡Ⅰ号窯（酒井・伊藤 1995）から出土している高盤類は、体部から直線的に外傾する口縁部を有するもので、7 世紀第 3 四半期から第 4 四半期の境の時期が考えられている。陶邑 T G 70 窯からも類似するものが出土しており、中村編年Ⅲ型式・第 2 段階（中村 1995）で 7 世紀後半代に位置づけている。脚付盤については口唇部が平坦で厚く作られるなど体部形状に若干の違いはみられるが、全体的な器形は近似するものである。



第 42 図 SD1 溝跡遺物出土状態図

また、滋賀県大津市の山ノ神2・3号窯及び灰原出土の須恵器(中村・藤原1996)には、本遺跡出土の須恵器と類似するものが多くみられる。7世紀前葉～後葉としている山ノ神窯跡出土の須恵器組成の中でも、特に脚付盤、宝珠ツマミ付きの蓋、平瓶は特徴が酷似している。以上のことから本類土器は、共伴土器などの時期も考慮すると概ね7世紀後半代の中で収まるものと考えられる。

フラスコ形長頸瓶は、Ⅱ期官衙の東区1号掘立柱建物跡に切られている第2号住居跡から出土(E-79-28)しており、本類の頸部にある2条の沈線を除けばほぼ類似する。フラスコ形長頸瓶は墳墓からの出土量が多いようで、善応寺横穴墓群(20・23号墓)や茂ヶ崎横穴墓群(1・20号墓)などでみられる。特に善応寺横穴墓群(仙台市1995)のものは頸部に2条の沈線を有し、器形なども本類に近いもので、7世紀後半のものとしている。一方、茂ヶ崎横穴墓群は土師器環や平瓶などから郡山遺跡Ⅰ・Ⅱ期官衙の遺物と共通性が認められるとし、同官衙に関係する集団の墓地の一つと考えられている。

(4) 出土土器の共伴関係について

前項で分類された各種土器の出土状況をみると、比較的まとまり共伴関係がある程度捉えられるものがある(第42図)。SDⅠ溝跡の南北方向の南側(Aグループ)と、東西方向の西側(Bグループ)の堆積土中2箇所出土の土器のまとまりをみることができる。溝跡は自然堆積の状況を示しており5層に大別され、そのうちの2層が水成堆積の様相を示している。土器類はこの2層の中～下位にかけて出土しており、溝跡が半分ほど埋まり、水が溜まっている状態の時に廃棄されたものとみられる。Aグループでは、土師器ⅡA・ⅡC類、小型ⅡA類、須恵器平瓶・脚付盤・フラスコ形長頸瓶がまとまり、Bグループは僅かであるが土師器ⅡA類と須恵器高環がまとまりをみせる。しかし、どちらのグループにも土師器の環や高環などはみられず、一般的な住居跡内における一括資料とは違う土器組成である。また、Aグループは、須恵器平瓶やフラスコ形長頸瓶などの組成から祭祀的なものが推察される。

2. 検出遺構について

今回の調査で検出された遺構は、溝跡7条・土坑3基・井戸跡2基・性格不明遺構4基である。これらの遺構の重複関係(第Ⅵ章参照)をみると、SDⅠ溝跡が最も古い時期のものである。ここでは、郡山Ⅰ期官衙との関連が考えられるSDⅠ溝跡について検討していきたい。

Ⅰ期官衙は、東に30～40°(西に50～60°)振れた方向を基準に造られており、東西約300m、南北600m以上の広がりを有する。7世紀中頃～末葉にかけての時期のもので、陸奥国北部の評制成立以前の「柵」として設置されたと考えられている。Ⅰ期官衙の西辺は、SDⅠ394溝跡(第99次調査)とSDⅠ492溝跡(第103次調査)を結んだラインが想定されており、今回検出されたSDⅠ溝跡は西辺ラインの官衙の外側に位置(第43図)している。L字型に検出された南北方向(東に35°振れた方向)は、官衙西辺ラインと約75mの間隔でほぼ平行して北側に延びるように走る。また、南側で直交する東西方向は東側に延びるように走り、西辺推定ラインと交差するとみられる箇所は、Ⅰ期官衙の南西コーナーから北に約230mの位置である。

SDⅠ溝跡の上幅は2.4～4.3m、深さ59cmで、横断面は逆台形を呈する。西辺ラインのSDⅠ394溝跡をみると、上幅1.85～3.78m、深さ90cmで、逆台形を呈するなどほぼ同様の規模・形状である。また、西辺ラインのSDⅠ394・492は出土遺物からⅠ期官衙の後半代としている。なお、SDⅠ溝跡の内側(官衙側)にあたるⅠ・2・3トレンチの調査では、後世の削平が激しく官衙に関連するような他の遺構は検出されていない。

SDⅠ溝跡の底面から出土した土器類はなく、堆積土中位の水成堆積を示す2層から少しまとまって出土している。これらの土器類は、溝がある程度埋没した段階に入り込んだもので、内訳をみると土師器は、外面調整がワケメ主体のⅡA類が3点、ミガキ主体のⅡC類が1点、小型ⅡA類が1点である。須恵器は平瓶・フラスコ形



第 43 図 I 期官街との位置関係図

長頸甕・脚付甕・高環の脚部などが1点ずつ出土している。土師器は特徴などから、古墳時代後半の特徴を示す栗圍式に含まれるもので、7世紀後葉～8世紀初頭のもと考えられ、共存する須恵器類もその中に納まるものと考えられる。以上のことから土器の出土層と溝の埋没時間差を考慮すると、SD1溝跡は7世紀中葉～後葉のものとみられ、I期官衙の時期には存在していたもので、官衙に直接的に関連するもの、または周辺の地割りに伴う溝であることが考えられる。

第IX章 調査成果のまとめ

今回の調査は、仙台市あすと長町土地区画整理事業に伴い、事業地内に計画されている都市計画道路と区画道路部分の確認調査及び本調査を行った。調査対象地内での遺構の広がりや内容を確認するために、9箇所のトレンチを設定し調査を行った。このうちの5トレンチの調査で検出された大溝（SD1）は、郡山遺跡I期官衙に関連するものと考えられたため、溝の延長部分を拡張し本調査に切り替えて調査を行った。

以下、それぞれの調査成果についてまとめる。

<確認調査>

1. 遺構は古代面であるⅡ層上面での検出が多く、2トレンチで溝跡1条（SD2）・土坑2基（SK1・2）、5トレンチで溝跡2条（SD1・2）・性格不明遺構1基（SX3）が検出された。これらの遺構は、中世以降の遺物が出土していないことから、I期官衙～古代にかけてのものと考えられる。
2. 古代面以下の下層調査は、2・6・7・9トレンチで行った。2トレンチではⅤ層上面で溝跡1条（SD7）、9トレンチではⅢ層上面で土坑1基（SK3）を検出、Ⅳ層上面で炭化物の広がりを確認した。また、9トレンチのⅤb層では、縄文時代晩期の大洞A式土器が3個体まとまって出土した。そのため、遺物の広がりや遺構の確認をするため、南側を拡張し調査を行った。遺構は検出されなかったが、Ⅲ層で弥生時代中期の樹形囲式土器が出土した。SD7溝跡は、遺物は出土しなかったが検出層位から、縄文時代晩期以降～弥生時代にかけてのものと考えられる。また、SK3土坑も遺物は出土しなかったが、検出層位から弥生時代以降のものと考えられる。

<本調査>

1. 遺構はⅡ層上面で、溝跡6条（SD1～6）・井戸跡2基（SE1・2）・性格不明遺構2基（SX1・2）が検出された。このうち重複関係で、SD1溝跡を切るSD2・3・5溝跡、SE2井戸跡、SX1・2性格不明遺構は、中世以降の遺物が出土していないことからI期官衙以降の古代のものと考えられる。また、SD4・6溝跡も重複関係及び出土遺物から古代のものと考えられる。
2. SD1溝跡は平面形がL字形を呈し、南北方向（東に35°振れた方向）はI期官衙の西辺推定ラインと約75mの間隔でほぼ平行関係にあり、さらに北側に延びている。南側で直交する東西方向は東に延び、西辺推定ラインと交差する可能性もある。時期は出土遺物や堆積状況などから7世紀中葉～後葉のものとみられ、I期官衙が機能していた時期に相当するものである。以上のことから、官衙に直接的に関連する溝跡、または官衙周辺の地割りに伴う溝跡の可能性が考えられる。
3. 今後、SD1溝跡の東西方向の東側とI期官衙西辺推定ラインとの間の調査がされるようなことがあれば、この溝の性格も明らかになるものと考えられる。

参考文献

- 氏家 和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 田辺 昭三 1966「陶器古窯址群1」平安学園考古学クラブ 研究論集第10号
1981「須恵器大成」角川書店
- 丹羽 茂 1981「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ 清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集
- 加藤 道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」考古学論叢Ⅱ
- 木本 元治 1990「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」考古学古代史論叢
- 菊池 佳子 1994「多賀城以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第82輯 東北史学会
- 中村 浩 1995「須恵器集成図録 第1巻 近畿編Ⅰ」雄山閣
- 酒井 清治・伊藤 博幸 1995「須恵器集成図録 第4巻 東日本編Ⅱ」雄山閣
- 中村 浩・藤原 学 1996「須恵器集成図録 第2巻 近畿編Ⅱ」雄山閣
- 村田 晃一 1995「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究第4号』東国土器研究会
- 佐藤 憲幸他 1997「山王遺跡Ⅴ」宮城県文化財調査報告書第174集
- 白鳥 良一・古川 一明 1998「土師器の編年 東北」『古墳時代の研究』第6巻
- 渡邊 泰伸 1998「須恵器の編年 東北」『古墳時代の研究』第6巻
- 三好 秀樹 1999「一里塚遺跡 第44・47次発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第179集
- 村田 晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学2』宮城考古学会
- 奈良 佳子 2003「宮城県域の7世紀の須恵器」古代東北北海道研究会資料
- 東北古代土器研究会 2005「東北古代土器集成—古墳後期—奈良・集落編—<福島>」研究報告1
- 松本 太郎 2008「関東系と東北系 千葉県・茨城県を中心に」『古代社会と地域間交流』発表資料 国士館大学
- 村田 晃一 2008「宮城県の様相」『古代社会と地域間交流』発表資料 国士館大学
- 長島 榮一 2009「郡山遺跡 飛鳥時代の陸奥国府跡」日本の遺跡35
- 仙台市教育委員会 1978「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」仙台市文化財調査報告書第13集
- 仙台市教育委員会 1979「栗道跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第14集
- 仙台市教育委員会 1982「栗道跡」仙台市文化財調査報告書第43集
- 仙台市教育委員会 1989「茂ヶ崎横穴墓群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第130集
- 仙台市教育委員会 1992「郡山遺跡 第65次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第156集
- 仙台市 1995「仙台市史 特別編2 考古資料」仙台市史編さん委員会
- 仙台市 2000「仙台市史 通史編2 古代中世」仙台市史編さん委員会
- 仙台市教育委員会 2001「郡山遺跡 第124次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第251集
- 仙台市教育委員会 2003「郡山遺跡23 平成14年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第263集
- 仙台市教育委員会 2004「郡山遺跡24 平成15年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第269集
- 仙台市教育委員会 2005 a「郡山遺跡発掘調査報告書 総括編(1)・(2)」仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2005 b「郡山遺跡25 平成16年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第284集
- 仙台市教育委員会 2005 c「郡山遺跡第162次1区・第164次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第288集
- 仙台市教育委員会 2006「郡山遺跡26 平成17年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第296集
- 仙台市教育委員会 2007「長町駅東遺跡 第4次調査」仙台市文化財調査報告書第315集
- 仙台市教育委員会 2008「長町駅東遺跡 第1・2次調査」仙台市文化財調査報告書第324集
- 仙台市教育委員会 2009「郡山遺跡29 平成21年度発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第347集
- 宮城県考古学会 2009「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会」発表要旨

写 真 图 版



調査区全景（南西から）



調査区全景（南から）



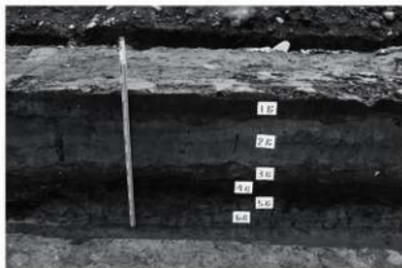
調査区遺構検出状況（南西から）



調査区遺構検出状況（西から）



1トレンチ完掘 (南から)



1トレンチ東壁断面 (西から)



2トレンチ完掘 (西から)



2トレンチ北壁断面 (南から)



2トレンチSD 2完掘 (西から)



2トレンチSK 1完掘 (南から)



2トレンチSK 2完掘 (西から)



2トレンチSD 7完掘 (南から)



3トレンチ完掘 (南から)



3トレンチ東壁断面 (西から)



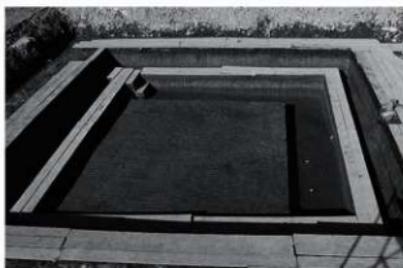
4トレンチ完掘 (東から)



4トレンチ東壁断面 (西から)



5トレンチ SD 1 検出状況 (南から)



6トレンチ完掘 (南から)



6トレンチ 東壁断面 (西から)



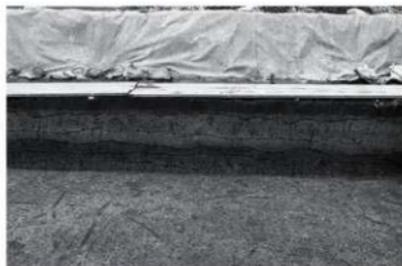
7トレンチ完掘 (西から)



7 トレンチ東壁断面 (西から)



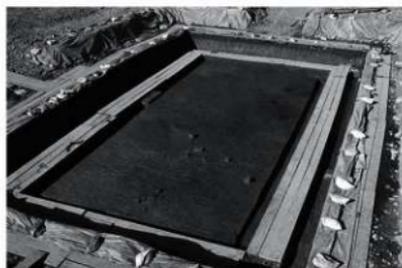
8 トレンチ完掘 (南から)



8 トレンチ東壁断面 (西から)



9 トレンチ完掘 (南から)



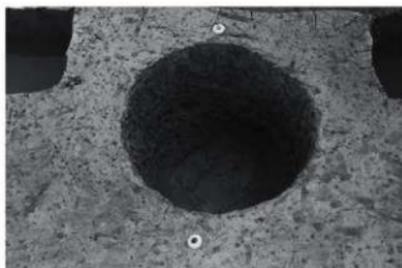
9 トレンチⅢ層上面検出状況 (南東から)



9 トレンチ北壁断面 (南から)



9 トレンチ 縄文土器 (A-2) 出土状況 (南から)



9 トレンチ SK 3 完掘 (西から)



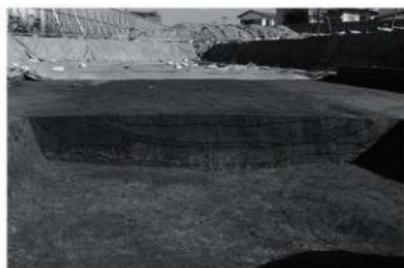
9トレンチSK 3断面 (南から)



SD 1 南北方向検出状況 (南から)



SD 1 東西方向検出状況 (西から)



SD 1 AA'断面 (南から)



SD 1 B-B'断面 (南から)



SD 1 C-C'断面 (南から)



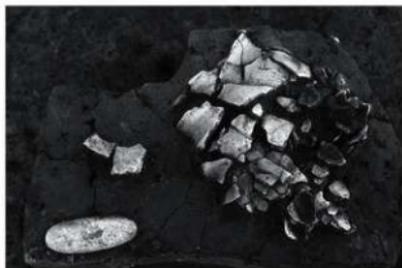
SD 1 E-E'断面 (東から)



SD 1 遺物出土状況 (西から)



SD 1 須恵器 (E-24) 出土状況 (南から)



SD 1 土師器 (C-20) 出土状況 (南から)



SD 1 遺物出土状況 (南西から)



SD 1 土師器 (C-24) 出土状況 (東から)



SD 2 北側部分完掘 (西から)



SD 2 南側部分 (左)・SD 3 (上) 完掘 (西から)



SD 2 C-C' 断面 (北から)



SD 3 完掘 (北西から)



SD 3 A-A'断面 (西から)



SD 4 A-A'断面 (南から)



SD 5 完掘 (西から)



SD 5 完掘 (南から)



SD 5 A-A'断面 (西から)



SD 5 B-B'断面 (西から)



SD 6 完掘 (西から)



SD 6 完掘 (東から)



SD 6 C-C' 断面 (西から)



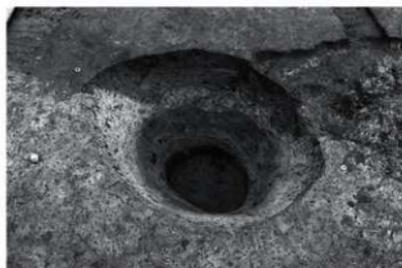
SD 6 P 1 断面 (東から)



SE 1 完掘 (南から)



SE 1 断面 (南から)



SE 2 完掘 (西から)



SE 2 断面 (西から)



SX 1 断面 (東から)



SX 2 (手前) 断面 (東から)



1 (N-3)

2 (N-2)



3 (Ka-4)



4 (Ka-5)



5 (C-14)



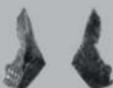
6 (E-1)



7 (P-1)



9 (Ka-8)



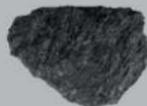
10 (Ka-6)



8 (P-2)



11 (Ka-10)



12 (Ka-9)



13 (E-21)



14 (B-1)

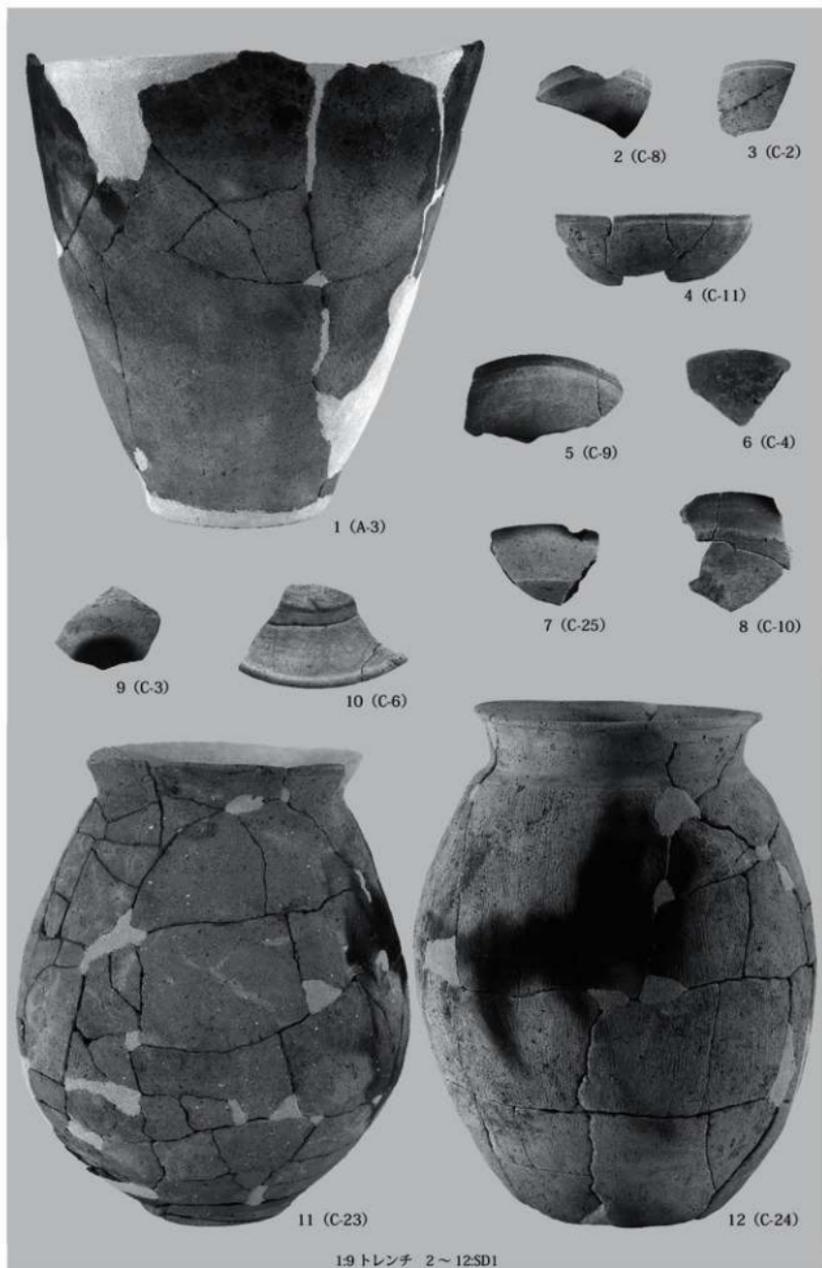


16 (A-2)



15 (A-1)

1・2:1 トレンチ 32 トレンチ 43 トレンチ 5～84 トレンチ 9・106 トレンチ 11・12.8 トレンチ 13～169 トレンチ



1:9 トレンチ 2～12:SD1

写真図版 11



1 (C-20)



2 (C-16)



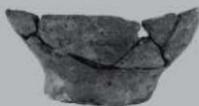
3 (C-18)



4 (C-17)



5-1 (C-12)



6 (C-26)



5-2 (C-12)



7 (C-7)



8 (C-22)

1~8SD1

写真図版 12



1 (C-19)



2 (C-21)



3 (E-9)



4 (E-10)



5 (E-15)



6 (E-16)



7 (E-5)



8 (E-4)



9 (E-24)



10 (E-23)



11 (E-22)

1 ~ 11SD1

写真図版 13



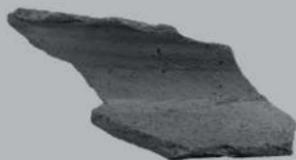
1 (E-7・13)



2 (E-17)



3 (E-14)



4 (E-11)



5 (E-8)



6 (E-2)



7 (E-3)



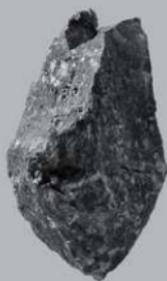
8 (E-6)



9 (E-12)

1~9SD1

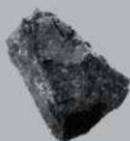
写真図版 14



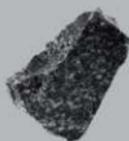
1 (Ka-1)



2 (Ka-2)



3 (Kc-13)



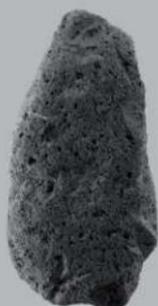
4 (Kc-2)



5 (Kc-3)



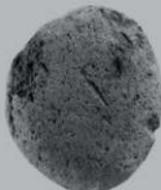
6 (Kc-9)



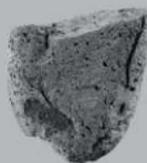
7 (Kc-4)



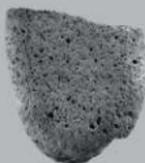
8 (Kc-5)



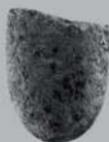
9 (Kc-15)



10 (Kc-11)



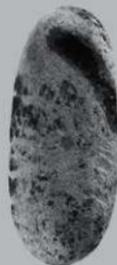
11 (Kc-12)



12 (Kd-6)



13 (Kc-6)

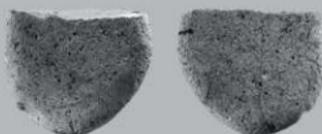


1 ~ 13SD1

写真図版 15



1 (Kd-1)



2 (Kc-8)



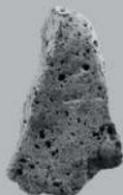
3 (Kd-4)



4 (Kd-5)



5 (Kd-7)



6 (Kc-14)



7 (G-1)



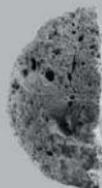
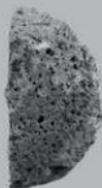
8 (P-5)



9 (N-16)



10 (N-19)



12 (Kc-10)



13 (E-18・19)



11 (N-17)



14 (E-20)



15 (C-15)



16 (P-6)

1 ~ 11:SD1 12SD2 13・14SD5 15・16SD6

報 告 書 抄 録

ふりがな	こおりやまいせきだい144じょうさ							
書名	郡山遺跡第144次調査							
副書名	仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第358集							
編著者名	工藤信一郎 荒井格 藤田亮一 福井流星							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号 TEL022-214-8894							
発行年月日	2010年3月12日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいほくくこおりやま 太白区郡山 にちょうめ 二丁目	4100	1003	38° 13' 12"	140° 53' 32"	2001/8/6 ～ 2001/12/19	確認調査 765 本調査 2,800	土地区画 整理事業 に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
郡山遺跡	包含地 官衙関連遺跡 集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 ～ 奈良時代	溝跡 井戸跡 土坑 不明遺構	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石器 石製品 金属製品	I期官衙関連溝跡			

仙台市文化財調査報告書第358集
郡山遺跡第144次調査

— 仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ —
2010年3月

発行 仙台市教育委員会
〒980-8671 仙台市青葉区二日町1番1号
TEL022-214-8894 (文化財課)

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
〒983-0036 仙台市宮城野区苫竹3丁目1-14
TEL022-231-2245